

おわりに——バニヤンの樹のごとく——

インドを原産とするイチジク属の大樹バニヤンは、傘のように横に張った枝から気根を垂らす。気根は地に届くと根を張り、新しい幹となる。そこから生まれた新たな枝と気根が、バニヤンの陣地をつぎつぎに拡げてゆく。成長した大樹のなかには、地上にさしかけた繁みのさしわたしが百メートル以上に達するものすらある。バニヤンの気根をブランコのようにして遊ぶ子供たちの姿は、なつかしいインドの情景である。

インドから海外への移民の流れは、しばしばバニヤン樹の成長のイメージに重ね合わされる。東南アジアへのインド文化の影響を描くにあたって、詩人ラビンドラナート・タゴールが用いた比喩が、後世広く人口に膾炙するようになった。タゴールがこの比喩を用いたのは、一九二七年、タイ（シヤム）を含むかれの東南アジア紀行に際してである。バニヤンの喩えは、華僑、

華人についてよく用いられる「落地生根」という言葉を思い起こさせよう。

本書で描いたのは、タイの土地にバニヤンの気根のように根づいたインドの人々の歴史とその現況である。「根づいた」と確信をもって言えるまでには、筆者には一年あまりの調査期間が必要だった。タイのインド人問題に関心をもちはじめた当初は、タイの人々、あるいはタイを知る日本の友人からは、いかにインド人が「嫌われている」か、いかにタイ社会とは異質な人々なのかというような話ばかり聞かされていたからである。インド人は高利をむさぼる、もうけた金はみな国にもって帰る、高慢で、理屈好きだ等々、いずれもインド人の悪口としてよく聞く類のもののだが、タイには「同化」では先輩格の華人の存在があるので、よけい異種の集団として目立ってしまうのだろうか。インド人はいまだにタイ社会のアウトサイダー、つまりは「客(ケーク)」なのである。

しかし、本書の第1部で詳しく書いたつもりであるが、タイのインド人社会について、筆者は少し違った印象を抱いている。タイのインド人は華人とは異なるスタイルでタイ社会と同化しようとしており、数も少なく目立たないが、すでに立派にタイ社会の一員である。きわめて短期の滞在者は別として、戦前からの移民の家系ではタイへの永住の意志には確固たるものがある。通婚の度合いこそ低い、言葉や教育の面ではタイ社会に見事に融けこんでいる。本文でも述べたように、インド人はタイ社会内の一要素、つまりマイノリティとみなされるべき集

団なのである。タイ研究では素人の筆者が、この本によって何かタイ研究にお返しができるとすれば、タイにおけるマイノリティ問題の一部としてのインド人問題に光をあてたところにあるのかもしれない。

全世界で千二百万とも、千五百万ともいわれる在外インド人社会のなかで、タイのインド人社会は、何か特徴のある位置を占めているのだろうか。十九世紀初頭から始まるタイへのインド人移民の多くが、中小の商人層から成り立っていたことは、プランテーション労働者を供給した隣のマラヤなどとは違う顕著な特徴であった。出身地域からみても、東南アジアへの移民の大宗を占める南インド出身者はしだいに比重を落とし、パンジャブ、ウツタル・プラデシュなど北部インドからの出身者が優位を占めるようになっていく。パンジャブ出身のシク教徒やヒンドゥー教徒は主に繊維などを扱う商人であり、ウツタル・プラデシュ出身者は事務員、門衛、酪農などを職とした。北インド出身者の優位は、東南アジアのなかではタイだけにみられる傾向である。移民社会が同郷集団や親族集団の核に吸引されるようにして増殖してゆくのは、世界のどこにでも見られる現象であるが、世界市場に開かれた通商国家的な性格の強いタイという国の特性が、商人層が根を張るにふさわしい土壌だったのだろう。

しかし自給的な性格の強い社会に異郷の商人が入り込めば、さまざまな摩擦が起こることは避けられない。反物一反を背負って売り歩き、金がなければ売掛金に利子をつける「高利貸し」

に変身するという、かつての芳しくないインド人イメージは、いまだにタイ人のあいだには生きている。成功したインド人の繊維商や工場主はタイの社会福祉事業に献金するなどの努力をはらっているが、負のイメージは払拭されていない。しかし、二世代、三世代と経るなかで、インド人社会は変化している。名前だけではインド系とは判断できないようなタイ語の名前をもつインド人も少なくない。すでに母語のパンジャーブ語を知らない世代も生まれている。また、かれらを受け入れる側のタイの社会自体のなかでも、文化的、政治的な多元性が成長してゆくにちがいない。タイで進んでいる「民主化」の中身には、マイノリティに対する受容力というようなものまでが含まれねばならないだろう。「インド人鼻唄」の筆者としては、そんな望ましい変化の方向をどうしても期待したくなるのである。

また、タイのインド人社会という、見落とされがちなマイノリティに当てた光から浮かび上がってきたのは、タイとインドとの関係もさることながら、日本とインドの関係、あるいはもつと広く日本のアジアとの関わりであった。タイのインド人について考えることは、私にとつては、タイという国を仲立ちにしてインドと日本について考えることでもあった。バンコクのインド人繊維商は、第2部で紹介したように、戦前は日本の対東南アジア繊維輸出と深く関わった。戦後はその一部が繊維工場主に転身するにあたって、日本の商社との戦前からの関係を活用したのである。また政治的な関係も深い。日本軍は第二次大戦への参戦にあたって、東南ア

アジア在住のインド人の動向に深い関心をはらっていたが、その工作の対象にはバンコクのインド人も当然含まれていた。実際に工作の対象になったサチデーヴァ氏の体験も、わずかながら第3部では紹介している。日本の支援したインド独立連盟、インド国民軍の活動を支えた東南アジア在住の移民のなかで、タイのインド人社会も資金と物資の面でめざましい貢献ぶりを発揮した。

しかし、第二次大戦下の日本とインドの関係には、いくつかの不幸な出会いもあった。本書で扱った泰緬鉄道建設での「労務者」の動員問題はそのひとつである。主にマラヤのインド人からなる「労務者」が受けた被害の大きさについては、筆者は文献で調べたにすぎないが、その重大さを再認識せざるをえなかった。マレーシア(マラヤ)研究者のあいだで泰緬鉄道に動員された「労務者」の問題が、生存するインド人の証言を掘りおこしながら、熱心に研究されつつある。その成果は、戦中、戦後の日印関係を見直すことにつながるかもしれない。

東南アジアの一隅で活動する十万人のインド人コミュニティに当てた光が、想いのほか複雑な色合いをもってはね返ってきたと、私はいま感じている。